

野 菜

【アスパラガス】

平均気温が 20℃を下回るようになると萌芽が減少し、16℃を下回ると萌芽が停止するとともに、光合成で生産された養分は地下貯蔵根に転流していきます。この時期が翌年へ向けた重要な時期で、長野地域では10月中旬から11月下旬頃となります。茎葉が黄化するまでは適度にかん水を行い、養分が順調に貯蔵根に転流できるように心がけましょう。施設栽培では10月に入っても萌芽が続きます。出荷しない場合は無駄に養分を消費させないために、若茎を2～3日を目安に切除し、過繁茂とならないようにします。茎葉が黄化するまでは風通しのよい「適正な立茎数」で管理しましょう

8月中下旬以降からやや標高が高い地域の一部や防除が上手くいっていないほ場で斑点病（褐斑病）の発生がみられています。また、アザミウマ類やダニの被害も目立つことがあります。これら病害虫が増えると、ぎ葉が早期に落葉し、十分な養分蓄積が行えません。進展しないように早めに防除を行きましょう。



写真 アスパラ茎に入ったオオタバコガ幼虫

【キュウリ】

抑制作型では収穫後半となり、日照不足や温度の低下もあって曲がり果や尻細果が増加する時期です。曲がり果など不良果は早めに除去し、草勢の維持を図ります。秋は日照時間が短くなりますので、老化葉の摘葉のほか、上位節側枝の葉は1～2枚摘葉して内部まで日が当たるようにします。応急処置として葉面散布剤を適宜散布するのもよいでしょう。

乾燥状態や草勢が低下すると、うどんこ病が発生しやすくなります。発生の著しい葉は摘葉し、伝染源を減少させて上で防除しましょう。また、散布ムラがないようにするとともに、薬剤耐性菌の発生を防ぐために同じ薬剤の連用は避け、ローテーション防除を基本としましょう。

【タマネギ】

定植適期は平均気温 12℃の時期（温暖地では10月下旬～11月初旬、寒冷地は10月中旬～下旬）となります。定植後から根付くまで20日程度かかるので、定植時期は遅れないようにします。

作業の都合で定植まで数日間苗を保管したい場合には、湿度の低い納屋に濡れたムシロを敷き、苗を立てて並べ、乾かないように散水して軽い「こも」を上にかけておきます。また、定植時に苗が乾いている場合は一度、水に浸漬してから定植しますが、過リン酸石灰 30g を水 10 ㍓に溶かした液（約 300 倍）に浸漬して定植すると発根が促進されて初期生育が良好になります。

定植時の理想的な苗姿は茎径6～7mm程度（甘 70 は4～5mm）、本葉4枚前後、茎の白い部分が短く、草丈25～30cmで葉が太く素直に伸びているものです。茎径が太すぎると、翌春に抽苔する危険性が高まり、茎径4mm以下で細い場合には凍害で生育が不良になることがあります。

施肥は、a 当たり、堆肥 200～300 kg、窒素 2～3 kg、リン酸 2.5～3 kg、カリ 2～2.5 kgが標準で、

この内の窒素とカリの半量とリン酸の全量は基肥として施用します。

【ハクサイ】

ゴマ症は体内の窒素過剰により主に発生する生理障害で、症状は中肋部表層にゴマ状の斑点を生じます。発生を助長する要因は①収穫の遅れ②窒素の多施用③肥効の遅れ④天候不順による日照不足などがあります（表1）。特に収穫が遅れ、過熟で外葉が老化すると多発しますので、適期収穫を大切にす。特に、毎年発生する圃場や、窒素過剰となりやすい圃場ではやや早めに収穫しましょう。

表1 ゴマ症の発生と諸条件（長野県野菜栽培指標 平成26年発行 より）

多発条件	有効と思われる対策
施肥窒素過剰	・適正窒素施肥量(15kg/10a前後) ・基肥を減らして、必要に応じて追肥・葉面散布 ・慣行性肥料・被覆硝酸石灰肥料の利用
日照が少ない・短日 →→光合成低下	・栽植密度を下げる ・終日日当たり良好なほ場で作付(特に秋ハクサイ)
外葉:小さい、少ない、立ち上がり早い →→光合成低下	・外葉が大きく(多く)、立ち上がり遅い品種 ・早晩生の異なる品種をうねごとに組み合わせる等の検討
品種・低温期(秋の収穫遅れ)・過熟 →→外葉での硝酸還元能力低下	・適期収穫 ・葉が大きく滑らかな品種
銅過剰 (銅殺菌剤、堆肥中の銅含有量)	・最低必要量の銅剤の散布 ・銅含有量の少ない堆肥を選択し、適正量を施用
土壌の過給態りん酸過剰	・りん酸肥料の無施肥または減肥
低温での長期貯蔵	・常温保管(流通)

【寒締め野菜】

秋冬季にパイプハウスなどを活用して、ホウレンソウやコマツナなどの軟弱野菜を収穫期に寒気にさらすことにより、食味が優れ栄養価が高まる「寒締め野菜」の最後のは種時期は、寒冷地で10月中旬、温暖地でも10月下旬が目安となります。

ホウレンソウは外気温4℃で生育が停止するので、寒冷地では11月中下旬、温暖地では12月初旬までに茎葉が収穫できる大きさまで育てる必要があります。寒締め期間は1～2週間を要するので12月上中旬以降に収穫期となります。

【越冬緑肥作物のは種】

冬作の緑肥作物は、ライムギやエンバクなどのムギ類が多く用いられますが、その効果は、①冬期間の土壌表面の風食防止、②土壌の物理性の改善 ③土壌病害の拡大防止・連作障害対策があります。

ただし、緑肥用エンバクは「黒斑細菌病」の感染植物となり、一部に罹病しやすい品種があります。次年度にアブラナ科野菜の栽培が予定されるほ場では、ライムギなどの黒斑細菌病が罹病しにくい緑肥作物を検討ください。

表2 主な緑肥作物の特徴

緑肥名	特徴	は種量	は種時期	すき込み時期
ライムギ	耐寒性が強く、土壌適応性も広い。 耐湿性はやや弱い。	8～10 (kg/10a)	9～10月	翌年4月～ 5月上旬
エンバク	ライムギより、耐寒性が劣り、寒地では越冬できない。 耐湿性はやや強い。	10～15 (kg/10a)	9～10月 (通常栽培では4月上旬～9月上旬)	一般には、 は種2ヶ月～ 75日くらい